

目次

| | | | |
|------------------|---|--------------------|---|
| 2007年度日本女性学会大会報告 | 1 | 幹事会活動紹介 | |
| シンポジウム | 1 | 「幹事のお仕事:第4回 学会誌編集」 | 5 |
| ワークショップ | 3 | | |
| 個人研究発表一覧 | 4 | | |
| ビデオ上映・懇親会 | 4 | 会員の著書 | 5 |

2007年度 日本女性学会大会報告

日時:2007年6月9日(土)・10日(日)

会場:法政大学市ヶ谷キャンパス

シンポジウム

「バックラッシュをクィアする一性別二分法批判の視点から」

発題者:井上輝子、風間 孝、クレア・マリイ

コメンテーター:田中 玲、金井淑子 (発言順)

コーディネーター:風間 孝

司会:釜野さおり、伊田久美子

大会シンポジウム報告

風間 孝(コーディネーター)

今年のシンポジウムは200名を超える方々が参加し、うち学会外から約5割強と、学会を超えた多くの人々に関心を持ってもらった一方で、提起された論点を十分に深めることができなかった。今回の企画を準備した側として、改めてシンポの趣旨および当日の論点をおさらいした上で、今後の課題について若干考えを述べたい。

今回のシンポジウムは、バックラッシュ言説においてレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェン

ダー(LGBT)等の性的マイノリティおよび若者のセクシュアリティに対する「フォビア(恐怖/嫌悪)」がしばしば登場しているにもかかわらず、それへの対抗言説がこれらの「フォビア」を周辺的な問題として位置づけ、ジェンダー(・バッシング)との関係性について議論が深められていないとの問題意識から企画をおこなった。そのうえでジェンダーとセクシュアリティが規範的異性愛のもとに緊密に結びついていることを明らかにするクィア・スタディーズのアプローチを導入することにより、より有効にバックラッシュに対抗する可能性を探

ることを意図していた。

シンポジウムでは最初に井上輝子さんが、性別二分法に積極面もあるものの、性別二分法を悪しきかたちで適用した性別二元制イデオロギーのもとで、性的少数者を含むステレオタイプの男女像から外れる男女の存在が非難の対象とされていることを指摘した。続いて風間は、バックラッシュ派だけでなく反バックラッシュ派においても十代の性行動の一般化をリスク化する傾向のあること、反バックラッシュ派による「ジェンダーフリー教育は中性人間を生み出さない」との対抗的言説が、性的マイノリティの否定につながる可能性を述べた。最後にクレア・マリィさんは、バックラッシュにおいては、性における二元論的構造を守るとともに、イエ制度に根ざした「子孫」を残す性愛に対する脅威として LGBT に対する「フォビア（恐怖／嫌悪）」が個人における不安としてだけでなく制度上の暴力としても生産されており、その目的は規範的な異性愛の再生産にあると論じた。いずれの報告も、セクシュアリティにおける異性愛規範とジェンダー規範とが不可分なものであることを確認したうえで、これまでの反バックラッシュ言説に新たな論点を提示する報告であったと考える。

今回のシンポに対して、性的マイノリティが語られる対象になってしまったのではないかと、「性的マジョリティ」が聴く側にまわり自らのセクシュアリティを問う契機にならなかったのではないかと指摘をいただいた。企画側としては、性的アイデンティティに基づいたのではなく、あくまで設定した論点を展開してくれると考える人に報告者および討論者をお願いした。しかしながら、当日のシンポジウムにおいて当初の趣旨に沿った形で報告と議論をうまく結びつけることができなかつた結果、このような指摘をいただくことになってしまったと考え反省している。あらためて、バックラッシュに対抗する上で、ジェンダー（・パッシング）と「フォビア」とを切り離すことなく、むしろその両者を規範的な異性愛の異なった形の表出として捉える必要性を改めて確認しシンポジウムの総括にかえたい。

シンポジウム感想

平野 遼

バックラッシュ言説の持つ性別二元制イデオロギーの指摘を井上氏、バックラッシュ言説へのフェミニズム側からの反論に含まれる LGBT の周縁化の可能性の指摘を風間氏、バックラッシュの持つさまざまなフォビアが

クィアに対して性別二分法規範の元に制度上の暴力として働くことの指摘を言語学の視点からマリィ氏がおこなった。

興味深かったのは、風間氏によるバックラッシュ派の言説に潜む「同性愛（者）やトランスジェンダーへの嫌悪や恐怖（ホモフォビア・レズボフォビア・トランスフォビア）」が彼らの用いる「中性人間」という表現を通じて「人間の中性化」という恐怖に繋がっている点を述べた上で、この点のフェミニストによる反論がセックスやジェンダーを「男（らしさ）」、「女（らしさ）」という二元化した差異として語ることを否定しないことで性的マイノリティの存在を隠蔽し、否定する可能性があるという指摘であった。また、質疑応答では、会場の質問からフェミニズムがセクシュアリティを語ることへのフォビアがあり、そのことに自覚的であるかという点が、コメンテーターである田中氏の経験談などを通じて論議を呼んだ。

風間氏の指摘や会場での議論から、戦略的に行っているにしろフェミニスト側からのバックラッシュへの対抗言説にはむしろクィアに対して相対的にマジョリティーであること、抑圧する可能性を持っていることに依然無自覚なのではないかという印象を抱かせた。

シンポジウムに参加して

中松知子

クィア論の視点に立ち、性別二元制を批判すると、対バックラッシュへの戦略がどう見えてくるのか、大会参加が初めてであることともあいまって、この興味深いテーマのシンポジウムへの私の期待は高かった。

発題者は3人とも、バックラッシュ側の言説に偏在する二元論的構造の暴力性を十分に指摘されていた。男女共同参画社会基本法が、すでにパッシングの言説の中で、国家が推進する規範的異性愛を強化する道具となっているという指摘（クレア・マリィさん）は重い。

しかし、このような議論が「クィアする」ということなのか、私にはいまひとつわからなかった。多様なヘテロセクシュアリティのある固定したかたちしか認めないバックラッシュ派の言説が、ヘテロ外のセクシュアリティに寛容であるとは考えられず、そこに共通項としてある「嫌悪感」を指摘するだけでなく、では、セクシュアリティの視点をどのように入れていくのが差別への対抗言説として有効だと考えているのかを、もう少し聞きたかった。「中性化」を否定せず（風間孝さん）、で、

その後どのように議論を構築するのか？

コメンテーターの田中玲さんだけが、自分のセクシュアリティを語るというはめ(?)になり、結果的に「性的少数者の性を覗き見する」ような感じになってしまったんじゃないかと思った。(紹介された田中さんの著書はとてもパワフルな本だった。)そして、会場から「フェミニズムの人とはセックスについて語れない」といったコメントが出たとき、「フェミニストを一元化するな」と、私は言いたかった！ 実行委員の皆様、ご苦労様でした。

シンポジウム感想

橋本ヒロ子

今回のシンポジウムテーマに強い期待を持って参加した。バックラッシュ派に対峙せざるを得ない立場にある一人として、今回のテーマは苦しいジレンマであったからである。

「男女共同参画（ジェンダー平等）は男女の違いをなくし人間の中性化を目指すもの」という主張が急激に広がり、ジェンダーフリーのみならず、男女共同参画や「ジェンダー」に拒否反応が出る状況になった時、国分寺市の要望書や2005年12月に閣議決定された「男女共同参画基本計画（第2次）」のように、「男女共同参画は男女を中性化するものではない」という性別2分化の論理や、「男らしさ、女らしさを否定するものではない」というジェンダー概念を否定する表現は、バッシングの火の粉を追い払うための当面の対応策としてとられている。1975年以降、政府と女性団体などが進めてきた日本の男女平等への活動は、地域で活動している一部の女性リーダーも含め、草の根の人々のジェンダー概念やセクシャリティに対する理解を広げ、深めることができなかつたからである。

一例として、性的マイノリティグループの代表者が制定会議のメンバーの一人であった宮崎県都城市の男女共同参画条例は「性別又は性的指向にかかわらずすべての人の人権が尊重され」と定め、日本では画期的な条例となった。しかし、産経新聞などで攻撃され、13対12でかろうじて議会で可決されたが、推進派市長が合併により落選したことにより、「性的指向」を削除した条例に改悪された。

世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数では115か国中80位(当初79位であったが80位に修正された)という日本女性の地位の低さにマスコミはほとんど注目せず、ワークライフバランス推進担当大臣の「女は

産む機会」発言について、国会で質問をした女性議員の事務所には全国から多くの苦情(男女)が寄せられた。また、東京都知事選挙では、「出産できなくなった女はゴミ」発言をした候補に投票をしたのは中高年女性が多かった。多くの地域で、性教育や男女共同参画推進活動は冬の時代を迎えている。

研究者だけでなく運動や活動にかかわっている人たちも会員であり、大会では実践活動報告もされるユニークな日本女性学会こそ、このような状況を変える担い手になれるのではという期待を持つのは楽観的すぎるのかもしれない。

ワークショップ報告

ポルノグラフィと性行動—スライドショーとアンケート結果を使って—

二瓶由美子

日常生活のいたるところに氾濫するポルノグラフィが、男性のみならず女性の性意識や性行動にどのような影響を与えているかについて考えようと、昨年行ったアンケート結果とスライドショーを使い、ワークショップを主催した。

はじめに、参加者に対しワークショップ開催の意図を簡単に説明し、「ポルノグラフィと性行動に関するアンケート」（男性対象）の結果と分析について、その概要を述べると共に、自由記述から読み取れる性意識について簡単に触れた。今回のアンケートとアンケート結果分析については課題も多く、今後の課題を参加者と共有するにとどまった。

つづいて、このワークショップのメインである、「スライドショー」を行った。暴力AV撮影現場、暴力AVのパッケージなど(二次被害に配慮して映像は最小限にとどめた)、インターネット上のポルノグラフィ、一見ポルノとは見えなくてもポルノとして消費されていると思われるホームページの実態などがスライドショーとともに紹介された。その上で、ポルノとは何かを参加者に問いかけた。たとえば、銀座や原宿のブランドショップの看板や、有名アーティストのCDのパッケージなどが、考察対象事例として示された。

プレゼンテーションのあとは、参加者の意見や感想をもとに、今後の課題などについて考察した。より多くの人々に共有してほしい課題だが、どのように伝えるべき

かといった、教育現場などでの試行錯誤といった具体的な悩みも共有され、充実した時間だった。

もっと話そう！「バックラッシュをクエアする一性別二分法の視点から」

伊田久美子

大会シンポジウムを継続し、シンポジストとともに、より多くの方々と議論することをめざしたワークショップであったが、参加者に積極的に発言してもらうために、シンポ感想とともに希望する範囲での自己紹介をしてもらったところ、一巡するのにほとんどの時間を費やしてしまい、ジェンダーとセクシュアリティ、フェミニズム・女性学とセクシュアル・マイノリティに関する議論が本格的に始まったところで時間切れとなってしまった。ジェンダーとセクシュアリティをめぐる参加者が語りたことを語り、他者の語りに耳を傾けることのできる場が求められていることを痛感することができた。女性学会は実践的課題と研究の結びつきをめざしてきたが、今回のテーマへのとりわけ若い世代を中心とする高い関心によって、制度化によってやや希薄化してきたかの感がある女性学の原点があらためて喚起されたのではないだろうか。ワークショップの進め方には時間配分も含めての配慮に課題が残った。

研究会活動等で今後も議論を継続していくことを確認して終了した。

個人研究発表一覧

第1分科会

- 近代日本における女性同性愛者— 新聞記事に見る問題化の位相 黄 綿史
- レズビアン自己表象と承認をめぐる一カミングアウトに関する一考察 堀江 有里
- 差異を含む〈わたしたち〉をどのように語る事ができるのか？ 飯野由里子

第2分科会

- 保育場面における保育者のジェンダー意識について 江島絵里子・内海崎貴子
- 男性の意識の変化と男女共同参画社会への展望—青森県男性の男女共同参画に関する意識調査を基に 佐藤 恵子

- 性サービス業における男性利用者の考察—インタビュー調査をもとに 多田 良子

第3分科会

- 民間シェルターの避難者分析から見えてくる21世紀日本の人身売買 谷村 和枝
- 中高年期女性の主体的力量形成—地域社会での学習活動から 水野桂子
- ブルデュー理論と現代家族におけるマルチリトメント 四之宮玲子

第4分科会

- 女性の過小代表とクォータ制—特定集団の政治的優先枠をめぐる考察 衛藤幹子
- 「新しい公共」における女性の活動の可能性—相互依存を認める社会をめざして 堀 久美
- 「男女平等」か「女の分断」か— 1975年「国際婦人年」以降のリブ運動を切り分ける論点 村上 潔

第5分科会

- 日本型フェミニズム理論構築への模索 三宅えり子
- フェミニズムと個人との距離、再考 荒木 菜穂

第6分科会

- 日本文学の中のレズビアン表象 渡辺みえこ
- 大学におけるジェンダー・セクシュアリティ課題の現状—立命館大学の事例から 吉野 鞆

ビデオ上映・懇親会

今年も総会の間、懇親会に出席される非会員の方々を対象にビデオ上映会を行った。今年は「ウーマンラブウーマン」（2000 アメリカ）と「Women…in…Struggle—目線」（2004 パレスチナ）の2本を上映した。参加者はそれぞれ20～25名であった。

懇親会は総会終了後、法政大学ボアソナードタワー26階ラウンジにて開催された。参加者は非会員を交えて53名。無農薬野菜、無添加調味料、野菜をたっぷり使った料理で定評のある、女たちのワーカーズコレクティブ「赤かぶ弁当」のヘルシーで美味しい料理で歓談した。

■ 幹事会活動紹介

幹事のお仕事（４）学会誌編集

千田有紀

皆さまの元に年一回届けられる日本女性学会学会誌『女性学』を編集するのが、編集委員の仕事である。まずは、たくさん投稿原稿がありますようにと祈ること、そして実際に「学会誌に投稿してくださいね」と宣伝することから編集の仕事は始まる。

投稿された原稿は、皆さんが懸命に書かれたものばかりである。できれば全部を掲載できたらと思うが、適切な査読者を選定し、依頼し、査読してもらい、候補原稿が決定される。査読者を決めるときには、「あのひとが適任だね」とすぐに決まることもあれば、「このテーマを研究しているひとがいるだろうか」と皆でうんうんと唸るときもある。女性学会に入っていらっしゃらない査読候補者には、いちから学会のことを説明し、お願いする。お願いしたのに断られることもあり、そうすると、また候補を決めなおさなくてはならない（なので皆さま、編集委員が「このひとしかいない」と選び出した方をお願いしているので、査読を頼まれたら、できるだけ引き受けてくださると幸いです）。

この一連のプロセスが終わると、つぎには、原稿の手直しを投稿者に依頼する。査読者の方がぎっしりといてくださった赤とアドヴァイスを活かして、もう一度書き直してもらうのである。書き直しが必要と判断された原稿は、その点が改善されたかどうかを検討し、最終的に掲載の可否が決定される。

そのあとは事務作業である。誤字・脱字を直し、数字の書き方、文献挙示などの形式を統一し、ネイティブに直してもらった英文に目をおし、コツコツコツと編集委員がチェックしていくのである。「こんないい方って、日本語である？」、「本文に挙げられている文献、出版年が間違っていない？」、「文献リストと対応していないよ！」。ワイワイガヤガヤおしゃべりしながら直していく時間は、高校の文化祭の準備のようで、大変だけど、楽しい。投稿者と数回の校正のやり取りののち、3月に新水社さんで、一日かけて最終校正。やり遂げたあとの達成感は、大きなものがある。今年はビールで乾杯したいですね。

■ 会員の著作紹介

- ・ 伊田広行「ジェンダーフリーバッシングの言説」
「私にとってのジェンダー問題——攻撃的であることを見直す」ジェンダー・学び・プロジェクト編集『ジェンダーの視点から社会を見る』解放出版社
2006年10月 1600円＋税
- ・ 伊田広行「ジェンダー重視時代の新しい政治」畑山敏夫・平井一臣編『新実践の政治学』法律文化社
2007年4月 2500円＋税
- ・ 北田幸恵『書く女たち』學藝書林
2007年6月 3000円＋税
- ・ 杉山直子『アメリカ・マイノリティ女性文学と母性：キングストン、モリソン、シルコウ』彩流社
2007年6月 2800円＋税
- ・ 中村桃子『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房
2007年7月 2800円＋税
- ・ 岩川直樹・伊田広行編著『貧困と学力』明石書店
2007年8月 2600円＋税
- ・ 平井和子『「ヒロシマ以後」の広島に生まれて— 女性史・「ジェンダー…」ときどき犬』
ひろしま女性学研究所 2007年8月 1000円＋税
- ・ 足立真理子・伊田久美子・木村涼子・熊谷貴美江編『フェミニスト・ポリティクスの新展開— 労働・ケア・グローバルバリエーション』明石書店
2007年9月 3800円＋税

以下のルールで会員のみなさまの著作を紹介します。掲載ご希望の方は、ニューズレター担当者までご連絡ください。

- 1) 会員が執筆・編集している単行本（分担執筆含む、雑誌をのぞく）
- 2) 1年以内の発行物
- 3) ご本人からお申し出があったもの
- 4) 寄贈は要件としない

ニューズレター担当：
木村 涼子
伊田久美子



■ 2008 年度日本女性学会大会について ■

日程は 2008 年 6 月 14 日（土）、15 日（日）

会場：青森県男女共同参画センター「アピオ青森」（予定）